月刊 No.434
2025 年 11 月 20 日
KURE BUSINESS NETWORK NEWS

呉通信

発行:(一社)広島県中小企業家同友会 呉支部
呉市中通 4-4-7 笹兵衛ビル 101
TEL0823-23-9711 FAX0823-23-9141
https://www.hiroshima.doyu.jp
編集責任者:広報委員長 白井 健人

2025 年 10 月 7 日　経営フォーラム 2025　第 4 分科会　より

「夢中って、最強。」
～栄光を掴むきっかけはいつも自分次第～

令和 7 年度 呉支部方針《スローガン》

Human First！新時代へ挑戦～人を生かす経営の総合実践で、企業づくり･未来づくり

呉支部会員数　422 名（2025 年 10 月 29 日現在）

取材先募集中！　ご希望の方は広報委員か事務局まで。

≪ TOPICS ≫

特集　経営フォーラム 2025 ・・・・・・2～5
地区会の報告 ・・・・・・・・・・・・・・6～7
部会の報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
臨時支部例会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・8
高校の先生方との懇談会 ・・・・・・・・・・・・8

【特集】経営フォーラム2025（10月7日(火)@リーガロイヤルホテル広島ほか）
人を生かす経営の総合実践で地域と共に変化に挑む！
～誰もが輝く21世紀型企業づくり～

去る10月7日（火）、リーガロイヤルホテル広島およびTKP広島本通駅前カンファレンスセンターにて、「経営フォーラム２０２５」が開催されました。呉支部は、４年ぶりに分科会の設営を担当いたしました。

ここでは、分科会を終えた報告者・座長・室長・設営チームメンバーの感想をご紹介いたします。

《報告者》
三工電機㈱　上川　博之　氏

「宝者」と「宝物」という一生の財産

今回、「夢中って最強。」というテーマで、人に支えられて歩んできたこれまでの人生を振り返り、夢中になることで「人を動かす力を生む」ということを本当に素敵な舞台で報告させて頂きました。

報告づくりの過程を振り返れば、これまでの時間そのものが“仲間と夢中になること”の意味を実感できる、素晴らしい時間でした。

今回のお話をいただいた当初は、「聞きたい人にだけ伝わればいい」と甘い考えをもっていましたが、分科会の仲間たちが「本気でいいものをつくろう！」と真剣に取り組み、私の報告づくりに関わって頂いた同友会の方々に、時に厳しい言葉を頂いたことで、自分の未熟さと本音に気づかされました。仲間たちの本気が伝わり、私の心にも火がつきました。

報告者　上川　博之　氏

互いの情熱が重なり合い、やがてチーム全体がひとつの想いで動きはじめ、最後には同じ熱で涙を分かち合える関係を築くことができました。

「本気は伝わる」。発表の中でお伝えしたこの言葉は、まさに私自身の実感です。

分科会の最後で、分科会の仲間たちから父の手紙をサプライズでいただきました。「素晴らしい仲間ができた」という宝者と、「仲間から頂いた父の手紙」という宝物。この二つは、私にとって一生の財産となりました。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった同友会の皆さま、そして何より、共に夢中で走り抜けてくれた仲間へ、心から感謝申し上げます。

《座長》
富田肥料㈱　富田　文平　氏

大きな飛躍のための売上目標１００億円

座長として報告作りを進める中で、どうしても避けて通れない疑問がありました。一つは「売上目標１００億円」という数字の必要性でした。現状の売上から見ると非現実的とも思える数値目標を掲げる妥当性がどこにあるのか。その疑問が解消されない限り座長としての仕事が完遂できないと思いました。

報告作りの当初から、上川氏にこの疑問をぶつけていました。その問答の中で彼からは「本質的には１００億円でなくても構わない。数字そのものに意味はない」であるとか、「極論を言えば、達成できるかどうかは重要ではない」といった言葉が返ってきました。疑問はさらに深くなりましたが、上川氏との話し合いを繰り返した結果、だんだんとその答えが明確になっていきました。

結論から言うと、彼は組織を変えたいがためにこの数値目標を設定した、ということでした。

彼が思い描く会社の使命を体現するためには、社員が既存の意識のままでは成し得ない。よって現状の意識を大きく変えるために（＝今までの考え方から大きく脱却してもらうために）、これまでと同じやり方では達成できないような数値目標が必要だったというわけです。

人は、大きな目標を与えられたときにはじめて、自分がどう変わらなければならないかを考えるようになるそうです。これを「ラス（＝RAS：脳の保守的な神経系）が発火する」というそうです。

言い換えれば、頑張れば達成できそうな目標では、人はコンフォートゾーン（ストレスのない居心地の良い環境や精神状態のこと）から脱却できず、既存の発想から抜け出せないということになります。

上川氏が描く会社像は現状の延長線上にあるのではなく、大きな飛躍の先にあるからこそ、１００億円

という壮大な数字を掲げる必要があったわけです。

氏の思いは見事に社員全員に伝播し、いま三工電機は劇的な変貌を遂げつつあります。彼と会社のさらなる発展を祈念するとともに、自分自身も変革していこうと決意を新たにする貴重な機会となりました。

おかげさまで分科会アンケート第１位となりました。ご参加いただいた皆様ありがとうございました。

左：室長の加藤氏、中：座長の富田氏、右：報告者の上川氏

《室長》
㈱Ｔ・Ｌｉｎｋタイヤサービス
加藤　泰一　氏

改めて自らの「使命」と向き合う

改めまして、報告者の上川さん、本当にお疲れ様でした。

９月４日の支部理事も交えたプレ報告では、多くの方々から貴重なご意見・ご指摘をいただきました。

その後、上川さんをはじめ実行委員会メンバー全員が、真摯に向き合い、議論と準備を重ね、全員が心を燃やして本番の舞台に立ちました。結果として「最高で最強の報告」となり、関わらせていただけたことに心より感謝申し上げます。

室長としては大きな役割を果たせたとは思っておりませんが、前室長である白井健人さんからのご指名を受け、その思いを胸に、出来る限りのサポートと雰囲気づくりに努めてまいりました。微力ながら、チームの一員として貢献できたことを嬉しく思います。

経営フォーラム２０２５・第４分科会を、この素晴らしい仲間たちと創り上げることができたことは、私にとって大きな財産となりました。

この経験を通して、改めて自らの「使命」と向き合い、今後も日々をワクワクしながら歩んでいきたいと思います。

これからも、夢中の連鎖を生み出し、Thank you・Technique・Trust、この３つの「T」を社員と共にLinkさせてまいります。

《分科会設営チーム》
㈲エピック　石田　健太郎　氏

「本気で」人と向き合い挑戦し続ける

第４分科会設営チームに参加させて頂き、諸先輩方と共に報告づくりに取り組む中で、多くの学びを得ることができました。

例会づくりを進める過程では、自身のヒントとなる言葉を数多くいただきました。中でも、例会タイトルにもなっていた「夢中って、最強。」という言葉を体現されていた上川氏の姿勢には、尊敬の念を抱くと同時に、「負けたくない」という前向きな気持ちが芽生えました。

順調に進んでいると思っていた分科会づくりでしたが、プレ報告の際に思いがけない酷評を受けることとなりました。今振り返ると、あの瞬間こそが分科会設営チームメンバー全員に火がついた転機だったのではないかと思います。

そこからは、互いに「本気で」関わり合いながら取り組み、結果として分科会アンケートで全体１位を獲得することができました。この成果は、まさに本気の関わりの賜物だと確信しています。

今回の経験を通じて、自社においても同友会においても、「本気で」人と向き合い、前向きに挑戦し続ける姿勢を大切にしていきたいと思います。

第４分科会のグループ討論の様子

《第３分科会》

新たな実践を踏み出す一歩に

第３分科会では、㈱社西川組 代表取締役 高重直文氏と、㈲ベルエール 取締役 金口志織氏が報告者として登壇し、経営指針書の作成と実践に対する姿勢を語られました。

左：金口 志織 氏　右：高重 直文 氏

高重氏は、経営指針書を作成し、社員と向き合いながらビジョンを共有し、会社の未来を語ることで組織を成長へと導いた実践と、具体的な成果について報告されました。

金口氏は、初めての経営指針書作成にあたり、社員と共に取り組まれたことを経営の転機と位置づけ、過去のトップダウン型・軍隊的な経営から、社員と共に方針を考える経営へと転換されたプロセスを共有。社員の協力と共感を得られた好事例として、印象深い報告となりました。

参加者は、「あなたは、未来を誰と共有しますか」というテーマのもとグループ討議を行い、それぞれの現場に即した課題意識を共有。多くの気づきと学びを得る、貴重な時間となりました。

報告を通じて、変化の時代における「人を中心とした経営」の重要性を改めて認識し、今後の実践に向けた新たな一歩を踏み出す機会となりました。

熱心に聞く参加者の様子

（記　平野自動車㈱　中下　真二）

《第７分科会》

政策提言・要望を経営者自らが発信

現在、政策委員会では政策提言の策定を進めており、来年の提出を目指しています。今回は、その参考となる情報を得る目的で、当該分科会に参加しました。

同友会が政策提言を始めたのは、創立直後のこと。当時は高度経済成長初期の好景気の反動による不況の中、多くの中小企業が倒産や淘汰の波に直面していました。そうした状況を受け、中小企業を守り、発展させるための経営環境改善運動として政策提言が始まったそうです。その後、国は中小企業の政策要望に応える形で、支援施策の基盤となる制度を実現してきたという歴史があります。

この歴史を池田氏が丁寧に紡ぎ、現在では40ページにも及ぶオリジナルの政策要望書を作成し、中小企業の発展に向けて陰ながら尽力してくださっています。この政策提言は毎年国会議員に手渡され、中小企業支援施策の策定に活用されており、一定の成果も上がっています。一方で、要望が年々増え続けているのが現状です。

私たち経営者自身も、積極的に発信する場を持つ必要があると改めて感じました。その一つの手段が、地方自治体における「中小企業振興基本条例」の制定です。この条例を活かし、地域の実情に即した課題解決を進めていくことが、やがて地域から国を変えていく力になるのだと気づかされました。

最後に、呉市が中小企業支援策を打ち出してくれているものの、「いつも的外れだ」という声があることにも触れられました。これは、私たち中小企業側が行政に対して政策提言や要望を十分に行ってこなかったことが、大きな要因であると改めて認識しました。

来年提出予定の政策提言に役立つ事例も多く、大変有意義な時間を過ごすことができました。

報告者　中同協　事務局長　池田 泰秋 氏

（記　㈱ライフハック　光田　将章）

《基調講演＆第６分科会》

「変化」し続ける経営者でありたい

基調講演は、大阪からお越しくださった川口加奈さんによるご講演でした。川口さんは14歳のときにホームレス支援の現場を経験されたことを原点に、19歳でホームレス問題の解決を目指す会社を立ち上げられました。現在も、社会課題の解決に向けて自らが広告塔となり、当事者の声を代弁しながら精力的に活動を続けておられます。

基調講演の様子

講演では、ホームレス問題の背景にある構造的な要因―教育機会の欠如、家庭環境、行政支援の限界など―を丁寧に解き明かし、就労・住居・貯蓄という「三つの壁」を段階的に取り除く支援モデルについてお話しくださいました。「知ったからには、知ったなりの責任がある」という言葉が特に印象的で、社会課題に対して“他人事ではなく、自分事として関わる姿勢”が強く伝わってきました。

第２部では、各分科会に分かれての討議が行われ、私は島根県同友会代表理事であり、モルツウェル㈱代表取締役の野津積さんが登壇された第６分科会に参加しました。

野津さんは、起業当初「ほっかほっか亭」のフランチャイズ経営からスタートされました。日本で初めて「温かい弁当の宅配モデル」を構築された際には、本部からルール違反として契約解除を言い渡されたそうですが、売上で全国３１０００店舗中１位を達成したことで、そのモデルが高く評価され、本部自らルールを変更することになったとのことです。この経験から、「ルールを変える力は“１番になること”だと学んだ」と語られていたのが印象的でした。

当時、宅配の仕組みづくりを共に行った中村理恵氏は、後に「出前館」の前身会社のトップとなり、事業を１９００億円で売却されたとのこと。紆余曲折を経て、現在のモルツウェル社は年商18億円に成長し、今後は１００億円企業を目指して事業拡大に取り組まれています。

野津さんは、人口減少や高齢化といった社会課題を“リスク”ではなく“ビジネスチャンス”と捉え、介護施設向けの調理済み食材サービスや、ワンオペで配膳が可能なシステムなどを展開。ＡＩやドローンといったデジタル技術との融合も進め、障がい者雇用にも積極的に取り組んでおられました。

また、２０４０年問題を見据え、優秀な人材の確保を最重要経営課題と位置づけ、採用活動に経営資源の多くを投じておられます。今後６年間で１３０人の採用を目指し、現在の１５０人体制から３００人体制への拡大を計画中とのこと。昨年末から今年５月までの半年間で34人（総合職15名、作業職・パート19名）を採用し、来年には早稲田大学出身の新入社員が入社予定だそうです。その新入社員を１年半にわたって取材したドキュメンタリー番組『ザ・ノンフィクション』が、フジテレビ系列で11月９日と16日に放映される予定とのことでした。

データをもとに社会課題を分析し、事業として解決していく姿勢。そして、社員一人ひとりの可能性を信じて採用・教育に力を注ぐ姿勢に、強く刺激を受けました。

懇親会には参加できず残念でしたが、「現状維持は衰退である」「維持発展こそが会社を続ける力である」という言葉が、改めて胸に残りました。

今回のフォーラムを通じて、時代の転換期をどう乗り越えるかを深く考えさせられると同時に、変化を恐れず、自らが“変態（成長のための変化）”し続ける経営者でありたいと、強く感じました。

第６分科会の様子

（記　㈲土本商会　土本　智）

《呉南地区会》

思いを行動に変える小さな経営判断

■開催日　10月24日（金）
■会　場　ビューポートくれ
■出席者　24名

呉南地区会10月例会は、「思いを行動に変える小さな経営判断～1人の母親が800万のM&Aを実現するまで～」をテーマに、24名の出席を得て、ビューポートくれ3F中会議室で開催されました。

報告者は、㈱UPLAUSE　代表取締役　沖野　芳恵さん。

報告者　沖野　芳恵氏

幼少期より野球やソフトボールに打ち込み、努力と忍耐・礼節を身につけて社会人となり、自衛隊勤務を通じてアクリル加工の仕事と出会い、その技術の奥深さに魅了されました。

地元企業で実務経験を重ねた後、自社を設立されます。現場で培った知識を活かしながら、設備製作や加工分野で確かな信頼を築いて、800万円でM&Aをします。

ご報告では「経験を糧に挑戦し続ける姿勢こそ成長の原動力」と語られ、経営者としての行動力と信念が印象的でした。

地道な努力の積み重ねと地域への貢献を重視する姿勢に、参加者から大きな共感と刺激を得る例会となりました。

例会の様子

（記　カワベ眼鏡店　河部　隆行）

《呉中央地区会》

近況報告例会　個性あふれる味とスピーチ

■開催日　10月20日（月）
■会　場　同友会呉事務所
■出席者　18名

呉中央地区会10月例会は、この時期恒例の「松茸すき焼き」を囲みながらの近況報告例会として開催されました。

まずは、参加者全員で4つのすき焼きを作るところからスタート。テーブルごとに工夫を凝らし、私たちのテーブルではビールを加えてコクを出すなど、個性豊かな味づくりを楽しみました。

近況報告は、お一人あたり2分を目安に行いましたが、時間をきっちり守る方もいれば、話が弾んでつい延びてしまう方もおられ、終始和やかな雰囲気に包まれていました。

報告内容も多彩で、海外での事業展開を進めている方、新たに事業を立ち上げた方、同友会のつながりを通じて新しい仕事へと発展させた方など、それぞれの挑戦や成果が共有されました。プライベートでは、ご家族の結婚式の話題など温かいエピソードも聞かれ、笑顔あふれる例会となりました。

最後に中谷地区会長から、「同友会での活動を通じて多くの気づきや学びを得て、たくさんの人と出会ったことがきっかけとなり、新たな事業に挑戦することを決めました。今年からスタートし、最初は赤字続きでしたが、半年が経ち、ようやく利益が出るようになりました。まだまだこれから新しい展開を考えています」と、熱い言葉で締めくくられました。

例会の締めくくりには、参加者全員で片付けを行い、会場をピカピカにして終了しました。

全員で記念写真

（記　㈲ハフリ　ハフリ美容室　祝　真嗣）

《広西地区会》

人的資本経営とは
人を生かす経営、採用から定着まで

■開催日　10月24日（金）
■会　場　ビューポートくれ
■出席者　11名

広西地区会10月例会では、「人的資本経営とは」をテーマに、パネルディスカッションを開催しました。

ファシリテーターには㈲イマムラの今村氏をお迎えし、パネリストとして㈱大下工業所の大下晃裕氏、㈱ＫＡＺＵＭの西田章宣氏、㈱芝岡産業の田中宗弘氏、の３名にご登壇いただきました。

ディスカッションの中でも特に盛り上がったのは「採用」に関する話題でした。各社が毎年求人活動を行っているという実情から、「なぜ求人活動が必要なのか」といった根本的な問いに始まり、「採用後の定着率をどう高めるか」といった実践的な課題まで、参加者からの質問も交えながら活発な意見交換が行われました。

その中で、「採用を本気で取り組むなら、経営者だけでは手が回らない。専任の採用担当者を置くことが必要だ」との意見が出されました。

また、必要とされる人材のタイプも企業によって異なり、Ｍ＆Ａによって幹部社員が求められる企業、高齢化に伴い若い世代の採用が急務となっている企業、事業拡大のために人手を必要とする企業など、さまざまなケースが紹介されました。

例会の様子

こうした背景を踏まえ、経営戦略をしっかりと立てた上で、「ヒト」という資本をいかに採用・育成・活用していくかが重要であることを、改めて認識する機会となった例会でした。

（記　㈲川中工業所　川中　雄太）

《青年部会》

思考の「筋力トレーニング」

■開催日　10月15日（水）
■会　場　呉森沢ホテル
■出席者　29名

10月の例会は、普段とは異なるスタイルで開催されました。今回は、参加者全員がチームに分かれてディベート対決に挑戦。テーマに対して賛成・反対の立場をとり、論理的に意見を交わすことで、経営者としての思考力や判断力を磨くことを目的としました。

ディベートのテーマは、同友会活動に関わる以下の４つの問いでした。① 会社にビジョンは必要か？② グループ討論はありか？ ③ 幽霊会員はありか？ ④ 同友会活動の学びは自社に必要か？

各テーマについて、３人１組のチームで20分間の討論を実施。さらに今回は、「シャラップカード（１分間発言停止）」や「助っ人カード（会場から１人をチームに加える）」といったユニークなルールも導入され、臨機応変な対応力が求められる場面も多く、会場は大いに盛り上がりました。

討論では、反対派の意見に対して賛成派が応答する場面が多く見られ、普段は肯定的に捉えていることを、あえて否定的な視点から考えることで新たな気づきが生まれていました。特に最後のテーマでは、人数的に不利な反対派が「運動」と「活動」の違いに着目し、鋭い論点で議論をリードする展開に。

人は日常的に、自分が肯定しているものを否定的に考えることは難しいものです。しかし今回のように、あえて賛成・反対の立場をとって討論することで、双方に新たな視点や観点が生まれたのではないでしょうか。

経営者にとって「話す・伝える力」も大切ですが、それと同じくらい「相手の意見を聞き、理解する力」も必要であることを、改めて実感できた例会となりました。

参加者全員で記念写真

（記　㈲正栄工業　谷口　真）

臨時支部例会（呉市との共催）
呉市中小企業・小規模企業振興基本条例実践シンポジウム
呉市における企業ＤＸの推進

■開催日　10月10日（金）
■会　場　広まちづくりセンター
■参加者　同友会より21名

「呉市中小企業・小規模企業振興基本条例（以下、条例）実践シンポジウム」が開催されました。

第１部の基調講演では、「呉市における企業ＤＸの推進」をテーマに、㈱ミジンコ　代表取締役の友村晋氏が登壇。ＡＩ（人工知能）やロボット技術の進展、エストニアのデジタル行政の事例を交えながら、日本におけるＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）の遅れと、それに対する危機感を語りました。

「ＤＸの遅れは、売上減少や人材流出、さらには行政支援の縮小にもつながる。だからこそ危機感を持ち、積極的に取り組むことが大切」というお話が印象的でした。

続く第２部のクロストークでは、友村氏に加え、同友会広島西支部長でシンワ㈱　代表取締役の太原真弘氏、呉信用金庫地域貢献部長の服部亨祐氏が登壇。

太原氏は、社員のＩＴパスポート取得やＲＰＡ（業務自動化ツール）導入など、ＤＸとリスキリング（学び直し）を進める自社の取組を紹介しました。そのうえで「ＤＸ推進には危機感と外部の伴走支援が不可欠。社員の創造性や人間性を大切にしながら、小さくても一歩を踏み出すことが重要」と語りました。

変化の波をチャンスと捉え、学びと創造を継続していくことの大切さを改めて実感するシンポジウムとなりました。

（記　事務局　木下）

クロストークの様子

《求人・社員教育委員会》

地域で若者を育て　地域に残すには

■開催日　10月28日（火）
■会　場　クレイトンベイホテル
■出席者　学校等16名、同友会18名

毎年春と秋の年２回開催している恒例行事。目的は、共同求人活動の一環として「共育」について意見交換を行い、先生方と経営者の相互理解を深めることにあります。なお、懇談会に先立ち、先生方による「企業訪問バスツアー」も実施されました。

日鐵鋼業㈱　能登 伸一 氏

今回は、問題提起として広島同友会副代表理事・能登伸一氏（日鐵鋼業㈱ 代表取締役）をお招きし、「我が社の考える“人を生かす経営”とは～ＧＣＨ（企業内総幸福）の追求で、社員が自ら考え行動する企業に」と題してご報告いただきました。

能登氏は、企業理念や経営方針の明確化、社員の幸福の追求、業務の見える化やコミュニケーションの強化、働き方改革の推進など、採用と社員育成に積極的に取り組まれています。特に、特別支援学校卒業生の採用事例を通じて、多様な人材の育成と、長期的な努力の重要性を強調されました。

その後は、「地域で若者を育て、地域に残すには」というテーマでグループ討論を行い、活発な意見交換が行われました。

（記　事務局　木下）

グループ討論の様子